

3) *C. caperatica* は八丈島に産し, *C. coniocraea*, *C. ochrochlora* 等に近縁の種であるが, 今迄クラドニアに未検の脂肪酸であるカペラート酸を含有することにより特徴づけられる。

4) *C. homosekikaica* は明かに *C. chlorophaea* group に属し, とりわけ *C. cryptochlorophaea* や *C. merochlorophaea* に形態的には勿論, 化学的にも最も類縁でホモ石花酸とフマルプロトセトラール酸の新しい組合せの成分を有する。北海道産。

○胡先驊博士の *Theopsis chrysantha* Hu, 金花茶について (津山 尚)

Takasi-TUYAMA: On *Theopsis chrysantha* Hu

胡先驊博士が *Theopsis chrysantha* Hu を新種として発表したのは植物分類学報 (Acta Phytotaxonomica Sinica) 10 卷 2 期 pp. 131-142, pl. XXIII, XXVIII, Apr. 1965 の p. 139 においてであった。その論文の表題は New species and varieties of *Camellia* and *Theopsis* of China (1) である。この文献は先方の寄贈によって 1966 年 2 月には著者の勤務先に届いた。この新種の記載文はラテン文, 英文とからなり, 中文のノート付である。引用標本は広西省邕寧県, Keng-Sa, no. 17530 (type), Dec. 25, 1960 及び同, 高如椿, no. 17628, Jul. 23, 1964 で前者は花のあるもの, 後者は若い果実のあるものである。この発表には図を伴っていない。興味の深いことは, 花色が“金黄色”, 英文で“golden-yellow”とあることである。これに関して胡博士は「やや大形の芳香のある金黄色の花を有すること」などは「他のすべての中国産の(同属の)種と区別される主要な点である。」と記している。博士は更に「もしこの種を他の(園芸)品種と交配したならば, 黄色の芳香ある品種を作出し得るであろう。……」と附記している。実は既に 1950 年の李時珍: 本草綱目の山茶の項に「或亦云有黄色者」の一文があるが, これが現代的の意味で何者であるかは, 分らない。胡博士の論文は Royal Horticultural Society: Rhododendron & Camellia Yearbook 1967 (London) 及び New Zealand Camellia Bulletin 5(-3), 1967 に転載された。但し, その際原典にあった図版 6 枚の中, 原色の 2 枚と中国文のノートは省略された。(省略された図版は本題の種類には関係がない。)この様にして, 本種は広く世界のツバキ愛好家の強い関心を唆った。それにも関わらず本種の標本は生きたもの, 押葉ともに中国の外部には出されていないようである。小生も 1964 年, 1972 年の欧米旅行では, 少なくとも同地の主要な腊葉館ではこれの標本を発見し得なかった。

しかる所, 藤沢市在住の中国系トウツバキ園芸品種の研究家池田金八氏は日中復交の直後から種々努力の結果, 広西医药研究所長荀義振博士 (Dr. Shun Yi-Chen) の好意による寄贈品として本種の押葉標本 2 枚を受領し, 研究を筆者にまかせられた。2 枚ともラベルには胡博士自身の手で *Theopsis chrysantha* Hu と同定され, 土名: 金花茶, 産地: 邕寧県富蔗庚下, 雑木林中, 採集人: 広西医药研究所 No. 17686, 1964 年 12 月 19

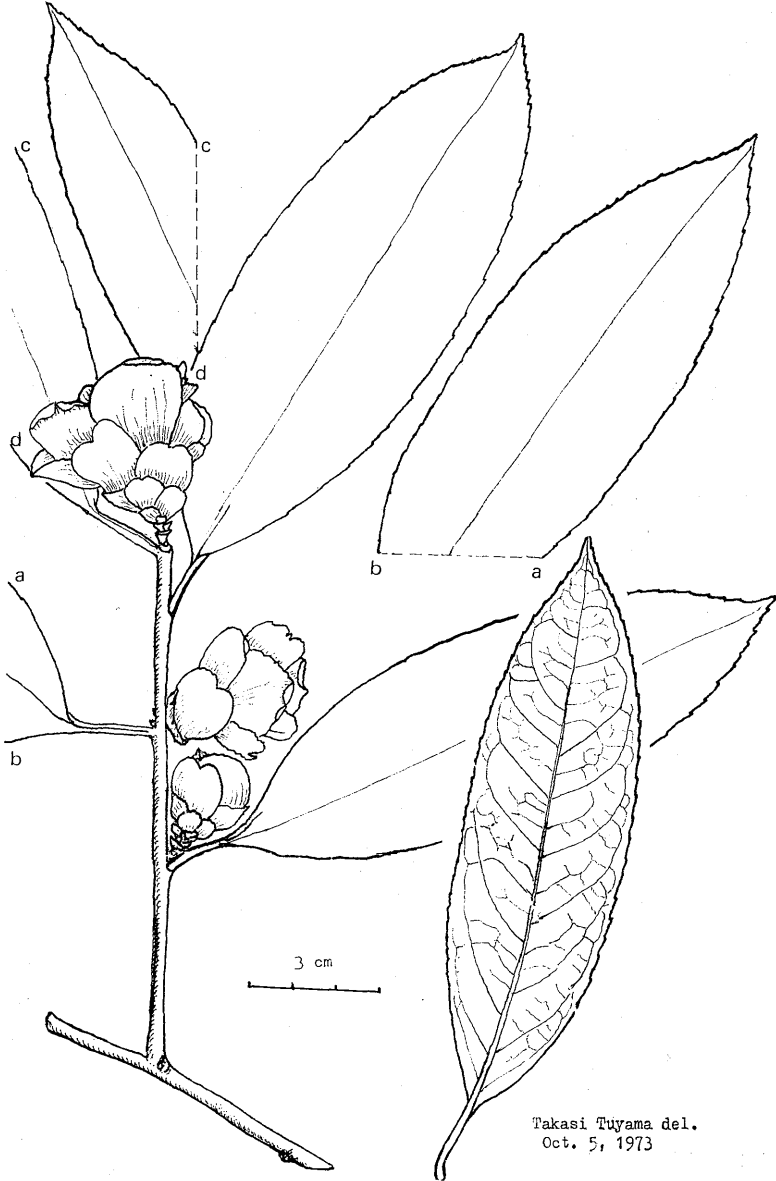


Fig. 1. *Theopsis chrysantha* Hu, 金花茶 (广西土名). This sketch is based on one of the two specimens, n. 17686 which was presented through the courtesy of Dr. Shun Yi-Chen, Director, Kwansi Pharmaceutical Institute to Mr. Kinhachi Ikeda, Fujisawa City, Kanagawa Pref. These two specimens are now deposited in TI.

日その他のデータがある。この標本は原記載の際には引用されていないが、タイプ標本に準ずるものである。2枚の標本の中、葉がやや小形で、花の多くある方の1枚から Fig. 1 を画いた。葉は革質で、裏面では細小な網脈まで隆起しているが、表面では葉脈そのものがやや不明瞭である。それで、Fig. 1 では裏面にのみ脈を表現した。この標本は一見した所、葉との大きさの割合で、花が小さく見える。図の最上方の花は殆んど満開のものが押葉になったと考えられたので、これを解剖して調べた。花卉の長さは 1.6-3.3 cm (胡博士によると 1.5-3.0 cm 以下同様)、花卉数 10 個 (8-10 個)、子房は無毛、花柱は 4 岐 (3-4 岐) している。葉は 2 枚の標本を通じて、長さ 14.2-21.3 cm (11-16 cm)、巾 3.4-9.2 cm (2.5-4.5 cm) 葉柄の長さ 1.4-1.5 cm (0.7-1.1 cm)。以上原記載によく合致する。ただし葉がより大型であるがこれは樹の枝によっても変化し得る範囲と考えた。少し気になることは、原記載に花糸に薄毛があるとしている点である。実見した限りでは全く無毛であった。この種の毛の存否はしばしば種類の特長として重要なものであるから、原記載のすべての部分について標本と照合したが、その他の点ではすべて合致した。ただし果実と種子は実物を見ていない。図示した葉縁の細鋸歯は実物ではもう少し細かく鋭くて、数が多い。花卉は乾燥によって当然いくらか収縮しているから、生時は直径 7 cm ほどあろうと推定する。

胡博士の採用した属、*Theopsis* は世界の通念としても、筆者の属に関する概念からしても *Camellia* に含まれる。それ故以下のように学名を変更する。この貴重な標本は東大総合研究資料館に収めた。

Camellia chrysantha (Hu) Tuyama comb. nov.

Theopsis chrysantha Hu in Acta Phytotax. Sin. 10(-2): 139, 1965

Spec. Exam. Kwangsi: Yung-Ning Hsien, below Hu-zhe-yu, in shrubby forest. leg. Kwangsi Pharm. Institute no. 17686, flowering specimens in 2 sheets. Dec. 19, 1964, in TI.

Two sheets of specimens determined by Dr. Hu Hsen-Hsu as *Theopsis chrysantha* Hu were presented to Mr. Kinhachi Ikeda, an enthusiastic camellia lover of Fujisawa City through the courtesy of Dr. Shun Yi-Chen, Director of the Kwangsi Pharmaceutical Institute. The specimens were carefully examined by the author. These agree very well with the original description of Dr. H. H. Hu, except that they have a little larger foliage leaves and the glabrous stamens. As no type specimen is reexamined by the author, further investigation in these respects is awaited.